

ミステリーの
愉しみ①

幻想の森

結川哲也
島田荘司

青年編集



ミステリーの
愉しみ①

奇想の森

鮎川哲也
島田荘司
責任編集

立風書房

ミステリーの愉しみ 第1巻

奇想の森

一九九一年十二月二十日 第一刷発行

編者 鮎川哲也／島田荘司

発行者 鎌倉 豊

発行所 立風書房

東京都品川区東五反田三六一一八

郵便番号 一四一

電話 〇三(三四四七)一一九一(代表)

振替 東京五七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社難波製本

© 1991 Tetsuya Ayukawa/Soji Shimada Printed in Japan

ISBN4-651-50271-7

落丁・乱丁本はお取替えします

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社宛許諾を求めて下さい。

ミステリーの
愉しみ①の

奇想の森

目次

江戸川乱歩……………	「屋根裏の散歩者」……………	7
小酒井不木……………	「痴人の復讐」……………	47
本田緒生……………	「街角の文字」……………	57
地味井平造……………	「煙突奇談」……………	69
岡戸武平……………	「五体の積木」……………	85
甲賀三郎……………	「蜘蛛」……………	97
米田三星……………	「告げ口心臓」……………	113
海野十三……………	「振動魔」……………	135
横溝正史……………	「蔵の中」……………	159

大下宇陀児	「偽悪病患者」	189
久生十蘭	「ハムレット」	219
大阪圭吉	「幽霊妻」	257
大坪砂男	「天狗」	271
青池研吉	「飛行する死人」	285
横内正男	「三行広告」	339
狩久	「落石」	365
吉野賛十	「鼻」	393
坂口安吾	「心霊殺人事件」	413
解説 島田荘司		449

装幀——菊地信義
装画——永畑風人

ミステリーの
愉しみ①

奇想の森

江戸川乱歩

えどがわらんぽ 明27(一八九四)・10・21、昭40(一九六五)・7・28 三重県名張市生れ。本名平井太郎。早稲田大学政経学部卒業後、古本屋など種々の職業を経験。失業時代に書いた「二銭銅貨」が『新青年』編集長の森下雨村に認められ、大正十二年四月の同誌でデビューする。以後、本格から怪奇幻想風のものまで優れた短編を次々と発表、探偵小説界をリードしていく。「蜘蛛男」などの長編スリラーや「少年探偵団」で一般的にも著名な探偵作家となった。太平洋戦争中に読んだ欧米作品に刺激をうけ、戦後は創作よりもそれらの紹介や評論が中心となり、昭和二十六年の評論集「幻影城」で探偵作家クラブ賞を受賞している。また、探偵作家クラブの会長や専門誌『寶石』の編集長として、そして江戸川乱歩賞を創設して、日本の推理小説の発展に大きく寄与した。幾度となく全集が編まれていたが、ローマ字教育やエスペラント語への理解、世界連邦や宇宙旅行への興味といった、創作以外の面に注目した研究が待たれる。

屋
根
裏
の
散
歩
者

多分それは一種の精神病でもあったのでしよう。郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、いっこうこの世が面白くないのでした。

学校を出てから——その学校とても一年に何日と勘定のできるほどしか出席しなかったのですが——彼にできそうな職業は、片っ端からやってみたのです。けれど、これこそ一生を捧げるに足ると思うようなものには、まだひとつも出くわさないのです。おそらく彼を満足させる職業などは、この世に存在しないのかもしれませんが。長くて一年、短かいのは一と月ぐらい、彼は職業から職業へと転転しました。そして、とうとう見切りをつけたのか、今では、もう次の職業を探すでもなく、文字通り何もしないで、面白くもないその日その日を送っているのです。

遊びの方もその通りでした。かるた、球突き、テニス、水泳、山登り、碁、将棋、はては各種の賭博に至るまで、とてもここには書き切れないほどの、遊戯という遊戯はひとつ残らず、娯楽百科全書というような本まで買い込んで、探し廻って試みたのですが、職業同様、これはというものもなく、彼はいつも失望させられていました。だが、この世には「女」と「酒」という、どんな人間だって一生生涯飽きることはない、すばらしい快楽があるではないか。諸君はきつとそうおっしゃるでしょうね。ところが、わが郷田三郎は、不思議とその二つのものに対して興味を感じないのでした。酒は体質に適しないのか、一滴も飲めませんし、女の方は、むしろその欲望がないわけではなく、相当遊びな

どもやっているのですが、そうかといって、これあるがために生き甲斐を感じるというほどには、どうしても思えないのです。

「こんな面白くない世の中に生き長らえているよりは、いつそ死んでしまった方がましだ」

ともすれば、彼はそんなことを考えました。しかし、そんな彼にも、生命をおしむ本能だけは備わっていたとみえて、二十五歳のきょうが日まで、「死ぬ死ぬ」といいながら、つい死に切れずに生き長らえているのでした。

親許から月々いくらかの仕送りを受けることのできる彼は、職業を離れても別に生活には困らないのです。一つはそういう安心が、彼をこんな気まま者にしてしまったのかもしれない。そこで彼は、その仕送り金によって、せめていくらかでも面白く暮らすことに腐心しました。たとえば、職業や遊戯と同じように、頻繁に宿所を替えて歩くことなどもそのひとつでした。彼は、少し大げさにいえば、東京中の下宿屋を一軒残らず知っていました。一と月か半月もいると、すぐに次の別の下宿屋へと住みかえるのです。もちろんそのあいだには、放浪者のように旅をして歩いたこともあります。或いはまた仙人のように山奥へ引き込んでみたこともあります。でも、都会に住みなれた彼には、とても淋しい田舎に長くいることはできません。ちよつと旅に出たかと思うと、いつのまにか、都会のともし火に、雑沓に、引き寄せられるように、彼は東京へ帰ってくるのでした。そして、そのたびごとに下宿屋を替えたことはいうまでもありません。

さて、彼が今度移ったうちは、東栄館という、新築したばかりの、まだ壁に湿り気のあるような、新しい下宿屋でしたが、ここで彼はひとつのすばらしい楽しみを発見しました。そして、この一篇の物語は、その彼の新発見に関連したある殺人事件を主題とするのですが、お話をその方に進める前に、主人公の郷田三郎が、素人探偵の明智小五郎と知り合いになり、今までいっこう気づかないでいた「犯罪」という事柄に、新らしい興味を覚えるようになったいきさつについて、少しばかりお話しし

ておかねばなりません。

二人が知り合いになったきっかけは、或るカフェで彼らが偶然一緒になり、その時同伴していた友だちが、明智を知っていて紹介したことからでしたが、三郎はその時、明智の聡明らしい容貌や、話しぶりや、身のこなしなどに、すっかり引きつけられてしまつて、それからしばらく彼を訪ねるようになり、また時には彼の方からも三郎の下宿へ遊びにくるような仲になったのです。明智の方では、ひよっとしたら、三郎の病的な性格に（一種の研究材料として）興味を見いだしていたのかもしれないませんが、三郎は明智からさまざまな魅力に富んだ犯罪談を聞くことを、他意もなく喜んでいました。

同僚を殺害して、その死体を実験室の竈で灰にしてしまおうとしたウェブスター博士の話、数カ国の言葉に通曉し、言語学上の大発見までしたユージン・エアラムの殺人罪、いわゆる保険魔で、同時にすぐれた文芸評論家であつたウェンライトの話、小児の臀肉を煎じて養父の癩病を治そうとした野口男三郎の話、さては、あまたの女を女房にしては殺していった、いわゆるブルーベヤドのランドルーだとか、アームストロングなどの残酷な犯罪談、それらが退屈しきつていた郷田三郎をどんなに喜ばせたことでしょう。明智の雄弁な話しぶりを聞いていますと、それらの犯罪物語は、まるで、けばけばしい極彩色の絵巻物のように、底知れぬ魅力をもつて、三郎の眼前にまざまざと浮かんでくるのでした。

明智を知ってから、二、三ヵ月というものは、三郎は殆んどこの世の味気なさを忘れたかに見えました。彼はさまざまな犯罪に関する書物を買ひ込んで、毎日毎日それに読み耽るのです。それらの書物の中には、ボーだとかホフマンだとか、或いはガポリオだとか、そのほかいろいろの探偵小説なども混じっていました。「ああ、世の中には、まだこんな面白いことがあったのか」彼は書物の最終のページをとじるときに、ホッとため息をつきながら、そう思うのでした。そして、できることなら、

自分も、それらの犯罪物語の主人公のような、目ざましい、けばけばしい遊戯をやってみたいものだと、大それたことまで考えるようになりました。

しかし、いかな三郎も、さすがに法律上の罪人になることだけは、どう考えてもいやでした。彼はまた、両親や、兄弟、親戚知己などの悲歎や侮辱を無視してまで、楽しみに耽る勇氣はないのです。それらの書物によりますと、どのような巧妙な犯罪でも、必ずどこかに破綻があつて、それが犯罪発覚のいと口になり、一生涯警察の眼をのがれているということは、ごく僅かの例外を除いては、全く不可能のように見えます。彼にはただそれが恐ろしいのでした。彼の不幸は、世の中のすべての事柄に興味を感じないで、事もあろうに「犯罪」にだけ、いい知れぬ魅力を感じたことでした。そして、いっそうの不幸は、発覚を恐れるために、その「犯罪」を行ない得ないということでした。

そこで彼は、ひと通り手に入るだけの書物を読んでしまふと、今度は「犯罪」のまね事をはじめました。まね事ですから、むろん処罰を恐れる必要はないのです。それはたとえばこんなことを。

彼はもうとくに飽き果てていた、あの浅草に再び興味を覚えるようになりました。おもちゃの箱をぶちまけて、その上からいろいろのあくどい絵の具をたらしかけたような浅草の遊園地は、犯罪嗜好者にとっては、こよなき舞台でした。彼は、そこへ出かけては、映画館と映画館のあいだの、人ひとりと漸く通れるくらいの細い暗い路地や、共同便所のうしろなどにある、浅草にもこんな余裕があるのかと思われるような、妙にがらんとした空き地を、好んでさ迷いました。そして、犯罪者が同類と通信するためでもあるかのように、白墨でその辺の壁に矢の印を書いてまわったり、金持ちらしい通行人を見かけると、自分がスリにでもなった気で、どこまでもどこまでも、そのあとを尾行してみたり、妙な暗号文を書いた紙切れを——それにはいつも恐ろしい殺人に関する事柄などを認めてあるのです——公園のベンチの板のあいだへはさんでおいて、木かげに隠れて、誰かがそれを発見するのを待ち構えていたり、そのほかこれに類したさまざまの遊戯を行なつては、独り楽しむのでした。

彼はまた、しばしば変装をして、町から町をさまよい歩きました。労働者になってみたり、乞食（こじき）になってみたり、学生になってみたり、いろいろの変装をした中でも、女装をすることが、最も彼の病癖（びへき）を喜ばせました。そのためには、彼は着物や時計などを売りとばして金を作り、高価なかつらだとか女の古着（がくち）だとかを買い集め、長い時間かかって、好みの女ずがたになりますと、頭の上からすっぽりと外套（がくち）をかぶって、夜ふけに下宿屋の入口を出るのです。そして、適当な場所で外套をぬぐと、あるときは淋しい公園をぶらついてみたり、ある時はもうはねる時分の映画館へはいつて、わざと男子席の方へ紛れ込んでみたり（注、大正末期の映画館は男女の席がわかれていた）、はては、その男たちに、きわどいいたずらまでやってみるのです。そして、服装による一種の錯覚（さくかく）から、さも自分が娼（だう）己（き）のお百（ひゃく）だとか、うわばみお由（よし）だとかいう毒婦（どくふ）にでもなった気持で、いろいろな男たちを自由自在（じゆうじゆう）に翻弄（はんろう）する有様（ようさま）を想像（さうぞう）しては、喜んでいたので、

しかし、これらの犯罪のまねごとは、或る程度まで彼の欲望を満足させてはくれませんでしたけれども、そして、時にはちよつと面白い事件（じけん）を惹（ひ）き起こしなぞして、その当座（とうざ）は充分慰（なぐさ）めにもなったのですけれど、まねごととはどこまでもまねごとで、危険（きけん）がないだけに——「犯罪（はんみん）」の魅力（みちり）は見方（みかた）によってはその危険（きけん）にこそあるのですから——興味（きょうみ）も乏（ひそ）しく、そういつまでも彼（かれ）を有頂（うてい）天（てん）にさせる力（ちから）はありませんでした。ものの三ヵ月（さんげつ）もたちますと、いつとなく彼はこの楽しみから遠（とほ）ざかるようになりました。そして、あんなにもひきつけられていた明智（めいし）との交際（こうさい）も、だんだん遠々（とほとほ）しくなつて行くのでした。

2

以上のお話（わ）によつて、郷田（ごうでん）三郎（さぶろう）と明智（めいし）小五郎（こごろう）との交渉（こうし）、または三郎（さぶろう）の犯罪（はんみん）嗜好（しこう）癖（へき）などについて、読者（よきや）に呑（の）み込んでいただいた上（うへ）、さて、本題（ほんだい）に戻（もど）つて、東栄（とうえい）館（かん）という新築（しんちく）の下宿屋（しゆくや）で、郷田（ごうでん）三郎（さぶろう）がどん

な楽しみを発見したかという点に、お話を進めることにいたしました。

三郎が東栄館の建築ができ上がるのを待ちかねて、いの一番にそこへ引き移ったのは、彼が明智と交際を結んだ時分から、一年以上もたっていました。従つてあの「犯罪」のまねごとにも、もうほとんど興味がなくなり、といって、ほかにそれにかわるような楽しみもなく、彼は毎日毎日の退屈な長い時間を、過ごしかねていました。東栄館に移った当座は、それでも、新しい友だちができたりにして、いくらか気がまぎれていましたけれど、人間というものはなんと退屈きわまる生きものなのでしょう。どこへ行つてみても、同じような思想を、同じような表情で、同じような言葉で、繰り返して繰り返して発表し合っているにすぎないのです。せつかく下宿屋を替えて、新しい人たちに接してみても、一週間たつたかたないうちに、彼はまたしても、底知れぬ倦怠の中に沈みこんでしまふのでした。

そうして、東栄館に移つて十日ばかりたった或る日のことです。退屈のあまり、彼はふと妙なことを考へつきました。

彼の部屋には——それは二階にあつたのですが——安っぽい床の間の隣に、一間の押入れがついていて、その内部は、鴨居と敷居とのちょうど中程に、押入れ一杯の頑丈な棚があつて、上下二段にわかれてゐるのです。彼はその下段の方に数個の行李を納め、上段には蒲団をのせることにしてしました。が、一々そこから蒲団を取り出して、部屋のまん中へ敷くかわりに、始終棚の上に寝台のように蒲団を重ねておいて、眠くなつたらそこへ上がつて寝ることにしたらどうだろう。彼はそんなことを考へたのです。これが今までの下宿屋であつたら、たとえ押入れの中に同じような棚があつても、壁がひどく汚れていたり、天井に蜘蛛の巣が張つていたりして、ちよつとその中へ寝る気にはなれなかつたのでしょうが、ここの押入れは、新築早々のことですから非常に綺麗で、天井もまっ白なれば、黄色く塗つた滑らかな壁にも、しみひとつできてはいませんし、そして、全体の感じが、棚の作り方に

もよるのでしょうか、なんとなく船の中の寝台に似ていて、妙に、一度そこへ寝てみたいような誘惑を感じさせるのでした。

そこで、彼はさっそくその晩から押入れの中へ寝ることをはじめました。この下宿は、部屋ごとに内部から戸締まりができるようになっていて、女中などが無断ではいつてくるようなこともなく、彼は安心してこの奇行をつづけることができるのでした。さて、そこへ寝てみますと、予期以上に感じがいいのです。四枚の蒲団を積み重ね、その上にフワリと寝ころんで、眼の上二尺ばかりの所に迫っている天井を眺める心持は、ちょっと異様な味わいのあるものです。襖をビッシヤリ締め切つて、隙間から洩れてくる糸のような電氣の光を見ていると、なんかこう自分が探偵小説の中の人物にでもなつたような気がして、愉快ですし、またそれを細目にあけて、そこから、自分自身の部屋を、泥棒が他人の部屋をでも覗くような気持で、いろいろの激情的な場面を想像しながら、眺めているのも、興味がありました。時によると、彼は昼間から押入れにはいり込んで、一間と三尺の長方形の箱のような中で、大好物の煙草をブカリブカリとふかしながら、取りとめもない妄想に耽ることもありました。そんな時には、しめ切つた襖の隙間から、押入れの中で火事でもはじまつたのではないかと思われるほど、おびただしい白煙が洩れているのでした。

ところが、この奇行を二、三日つづけているあいだに、彼はまたしても、妙なことに気がついたのでした。飽きっぽい彼は、三日目あたりになると、もう押入れの寝台にも興味がなくなつて、所在なさに、その壁や、寝ながら手の届く天井板に、落書きなどをしていましたが、ふと気がつくと、ちょうど頭の上の一枚の天井板が、釘を打ち忘れたのか、なんだかフカフカと動くようなのです。どうしたのだらうと思つて、手で突つばつて持ち上げてみますと、なんなく上の方へはずれることははずれるのですが、妙なことには、その手を離すと、釘づけにした箇所はひとつもないのに、まるでバネ仕掛けのように、もともと通りになつてしまします。どうやら、何者かが上からおさえていているよう